

EurekaXII

六年制通信 No.11 令和6年6月14日(金)号

百川学海

普段は昼間にテレビを観ることがないのでGW中だったと思いますが、ついいうっかりワイドショーのようなものが目に入り、ついにテレビもここまで来たかと唖然としたことがありました。前々からコメンテーターなる人たちを不愉快に思っていたのですが、それはその事柄に何らかの有益なコメントのできるはずもない素人さんが小学校の学級会レベルの意見を言うからなのです。テレビ局が悪いのでしょうかね。それで唖然としたというのは確かパレスチナ問題のことでコメントを求められたのが、何と若い産婦人科の女医さんだったのです。これ、ちょっとあまりに無茶ですよ。可哀そうですよ、その女医さんが。イスラエルとパレスチナ、ユダヤ人とアラブ人、あのあたりの問題は複雑すぎて世界で最も解決が難しいと言われています。素人の口出しできる問題ではありません。この問題では果たして日本に何人の専門家がいるのでしょうか。専門家と称する人はいるかもしれませんが、本当に研究している人は相当少ないと思いますよ。テレビは公共の電波ですから、それを使って何か有意義なコメントを出したいのなら本物の専門家を連れてくるべきです。

大学の先生方の質が落ちたと言われて久しいですが、大学の数がこれだけあればそれは当然と言わなければならないですね。本物の学者、本物の専門家となると十人に一人もいないと、すでに40年前に言われていましたから。専門家と言っても、例えばシェイクスピアの研究をしようと思っても相手が大きすぎて難しいので四大悲劇に絞って研究する、それでも困難なので『ハムレット』に限る、しかしそれでもすでに山のように研究書が残されていることを知って『ハムレット』に現れる幽霊について細かい研究し、『ハムレット』限定の幽霊の専門家となる、こんなのはダメです。こういうのは俗に専門バカと言うのです。私の先生がよく仰っていました。専門バカになってはいけない、でもまあ専門バカにすらなれない人が多いのだけれどね、と。

テレビの悪口になっていますが、テレビにも事情があると思います。専門家がコメンテーターとして向いているかということ、なかなかイエスとは言い難い面がありますからね。実際は専門家というのはテレビには向かないと思います。君たちは専門家の話は素人の解説よりもわかりやすいはずだと思っていませんか。もともとNHKのキャスターで「週刊こどもニュース」でわかりやすい解説だと人気の出たジャーナリストがいます。今も様々なニュースをわかりやすく解説する番組に出っていますが、あの方は学者でも専門家でもありません。だからこそ、わかりやすいのです。それは専門書よりも児童書の方が読みやすくわかりやすいのと同じです。専門家は核心部分を

詳しく知っているのは当然ですが、その周辺知識も豊富で様々な学説、あるいは数々の例外を知っているので、なかなか断定的なことは言えない上に、基本的に話が長くなります。さらに専門家の話をよく聞いて理解するには、こちらにもそれ相応の知識と最後まで話を聞く粘り強さが必要になります。従って、テレビで司会者の「わかりやすく話してください」というリクエストには専門家は向かないのですね。

しかし君たちは、特に大学に進学しようとする人なら、本物の学者に粘り強く学ばないといけません。本物の学者に出会わないといけません。出会えるかどうか心配はいりません。求めれば必ず出会えますから安心なさい。そして、立派な人を手本に努力をすればその人の領域に至ることができます。百川学海（ひゃくせんがつかい）という言葉があります。「百川海に学んで海に至る。丘陵は山に学んで山に至らず」ですが山の方はいいとして、百川学海とは、百の川は全ての川の意で川は海を目標に流れ、最後は海に至る。川は海を目指しているうちにやがて海になる、という意味。ここから私たちは、百川学海を努力を惜しまず良い手本に学べば自分の目標を達成できると、そういう意味に取っています。本物は即席の理解を拒むものです。わかりやすさというのは時に素人の領域にとどまりますから、そこで終わってしまっただけです。わかった気になるというのが勉強する上で最も戒めるべきものですからね。

今週のおすすめ

・岩井俊二 『ラストレター』 （文春文庫）

実は私、映画「チイファの手紙」を先に観ていたのです。岩井俊二監督の中国映画です。原作となった『ラストレター』を読む前の事でしたから何の先入観もなく楽しめました。ちょっと一か所わけのわからないシーンがありましたが…。そのあと本を読んで、やはり本の方がいいと思って、しばらくしてから日本の「ラストレター」を観たわけです。監督は岩井俊二。この人、原作を書いて中国で映画を作って、日本で同じ映画を撮ったことになります。変わった人ですね。

今回の経験、つまり一つのストーリーを書いた人が中国人のキャストと日本人のキャストで同じプロットの映画を撮った、舞台もそれぞれ中国と日本で、そしてそれらを観たり読んだりしたという経験で、私にもわかったことがあります。日本映画の場合、福山雅治、松たか子、広瀬すず、森七菜、神木隆之介とキャストを見ただけで誰がどの役か、そしてそれぞれの演技を概ね知っているのです。それらが原作に合っているかなどをすぐ考えてしまいますが、全くキャストを知らない場合は、当たり前ですが純粋にストーリーを追いつつ観ていることに気づきます。先に「チイファの手紙」を観たのは私にとっては正解でした。日本映画の広瀬すず vs 森七菜みたいな構図が中国人キャストでは全くイメージできないわけですから、変な邪念が入らなくていいですね。いずれにしても面白い試みでした。ただ、やはり本の方がいいです。なかなか原作を超える映像というのはいないものですね。というか、むしろ、映像よりも言葉からの方が人間の想像力というのは広げると言った方がいいかな。

BGMは マイケル・ジャクソン の ビリー・ジーン でした…。